

美術科教育学会通信 NO.41

2001年6月1日発行

学会事務局 〒640-8510 和歌山市栄谷930 和歌山大学教育学部 美術教育学研究室
TEL : 0734-57-7359,7358 (長谷川・永守研直通) FAX : 0734-57-7509,7508 (同)
通信担当 〒630-8528 奈良市高畑町 奈良教育大学 TEL&FAX : 0742-27-9223 (宇田研直通)

新代表理事挨拶 代表理事を務めるにあたって

柴田和豊 (東京学芸大学)

昨年の役員選挙を経て選ばれた新役員(総勢23名)の会議が2月にあり、私が新代表理事に選出されました。そして、活動しやすい体制を組んでよいとの了承のもとに、副代表理事に宮坂元裕(横浜国大)・藤江充(愛教大)の両氏、学会誌編集委員長に長田謙一氏(千葉大)を推挙し、3月の学会総会(筑波大)において私どもが、この8月から向こう3年間の学会の舵取りをすることが承認されました。それを受けて目下、理事の役割分担、事務局の在り方について検討をしているところです。

ところで、私が代表理事になることについての会員諸氏の反応を推測しますと、少なからぬ方が「えっ?」という疑問の声を上げるのではないのでしょうか。

私はこれまでに事務局長、学会誌編集委員長、副代表理事などを10年以上も務めてきました。その流れからいいますと、私には新鮮さが欠けており、停滞感の漂う昨今の教育状況の中で、学会に新鮮な空気を送り込む存在とは考えにくいのです。多くの方が「変わりばえのしない人事」と思っても不思議ではないことを承知しています。

他方、私の中にも、代表になることについて「えっ!」という思いがあります。泣き笑いの状態で様々な一事務的な事柄を果たしてきた10年間のことが甦るからです。はっきり

言って、私的な時間のかなりを費やしてきました。それゆえ、「またしんどいことを」という思いがいやでも湧いてきます。家人の反応も、私の健康状態を心配して芳しいものではありません。

ですから本当は私でない方がよいのです。新鮮さを感じさせてくれる人が望まれているはずです。

にもかかわらずやろうとするのは、多数決原理を除けば、世代的な責任と、学会がおかれている楽観できない状況を考えるのことで、いつの間にか私も50代になり、学会で責任をとるべき世代になっているのです。そして、楽観できない状況は時間数の削減から発する教科の存続さえ怪しいという雲行きと、学会内部の「事務局の引き受けてが、なくなっている」という事態です。

上述の難しい状況のうち、教科の存続に関わる問題は広く認識されていることです。学校教育の縮小に連動して、美術教育とこの学会の進路を改めて論議する必要があるのは周知のところだと思います。けれども事務局の引き受け手がなくなっているという事態については多くの方々が、切迫感を感じられないのではないのでしょうか。学会が上り坂にあった15年前くらいですと、やってもよいという奉仕精神の持ち主を探し出すことはむずかしくなかったと思います。しかし現在では、「大会をやるのはまだしも、事務局は...」というのが精一杯の反応なのです。本学会は、会員相互間に豊かな当事者感覚を育成することには成功してこなかったといっても、過言ではないのです。それゆえ、私にふんざりをつけさせたのは、代表理事と

という名の事務屋になるしかないという思いなのです。

幸い私の場合、これまでに会計以外は学会の仕事を全て経験してきました。それで、学芸大学もまたかつてのように事務局を構成できないとすれば、研究室の若い人の手を借りながら、事務的なことの調整役を果たそうと思っています。

とはいえ、誤解して頂きたいのは、学会を取り巻く懸案事項の議論を棚上げにするということではありません。2名の副代表理事をはじめ、理事には優秀な方々が選出されていますので、美術教育と学会の在り方をめぐる活力ある議論を現出させたく思っています。そのためには、重要な課題を整理し、各理事に諸課題に専任の形で関わってもらう体制が必要になります。冒頭に記しましたように、今そのことを検討しています。

一方において、学校での美術教育は縮小せざるを得ず、その反面現代社会にはかつてないまでに視覚的文化が広がる。この際わたしたちは、何より美術の良きエッセンスを明らかにし、コンパクトで明快な美術の教育を志向するのか、それとも時代や社会の趨勢に応える拡大された美術教育を構想するのか、どちらにシフトすべきなのでしょう。私自身としては二者択一者択一でない気持ちのよい議論の構築をしていきたいと思っています。会員諸氏の積極的な参画を心待ちにしています。

役員選挙の結果と経過について

選挙管理委員会代表 浜本昌宏

標記の件につきましては3月27日の総会で報告をし、承認を得ましたが、より多くの

会員の方にお伝えしたほうが宜しかろうという事務局の配慮から、通信上の文書でも、という依頼を受けました。確かに、開かれた学会として、また役員と会員の一体感を強める上でも有益な事と思い、以下、簡略に要点を報告いたします。

はじめに、結果のご報告

新理事(21名)(アイウエオ順・敬称略)

赤木里香子	新井哲夫	岩崎由紀夫
上山 浩	宇田秀士	大橋皓也
岡崎昭夫	金子一夫	花篤 實
柴田和豊	辻 泰秀	永守基樹
仲瀬律久	長田謙一	西野範夫
橋本泰幸	浜本昌宏	福本謹一
藤江 充	宮坂元裕	宮脇 理

監事(2名)

長谷川哲哉 増田金吾

以上23名

さて、次は選出経過の概要報告です。まずは昨年の総会で選挙管理委員会が発足しました。メンバーとして5名(金子、仲瀬、長田、増田、浜本)が選出され、立会人として、宮坂元裕氏が委嘱されました。選挙は、学会会則が示すように、役員の任期3年の修了に伴うものです。規定によれば理事は15名。その理事の合議により補充理事を若干名委嘱する事が出来るとあります。監事は2名。近年は、会の強化ということで補充理事を大幅に増やし、計30名体制でしたが、今日、会の財政は厳しく、通信費や旅費の補助などの節減が求められる折から、会則どおり15名を選び、それを基準に必要最小限の補充理事で、という方向で進行しました。

選挙管理委員会の仕事はなによりも会則に従い、公正に、会員の意志を民主的に反映させ、会の組織的基盤づくりにあろうかと思えます。したがって選挙にかかわるミスは許されません。遺憾の無いようにするためにも、前回の選挙管理委員会の代表者から、進行上の手順や留意点などを、6月の時点で引き継ぎました。

事務局や学会事務センターと連絡をとりながら現況を把握し、前回の選挙に準じた実施案を8月24日の役員会にはかり承認されました。(内容は8月13日現在の登録会員552名を対象に、会員一覧表を投票用紙とし返送用の封筒を添えるというもの)

これは従来行われてきた方法を基本的に踏襲したのですが、なにせ552名もの会員を対象とした一覧表の作成や発送実務だけに、その労は予想以上の事でした。

一つは、会員全員の名前を少しでも間違えて記載してはならない事です。そのためにもまず投票用の原簿を作成しまして、委員5人が会員名簿と照らし合わせたり、手落ちが無いように目を通しました。それを集約し、つき合わせてみますと、やはり誤字脱字が結構見つかりまして、はらはらしながらの訂正です。中には全くの同姓同名の方がおり、ご自宅へ確認の電話をさせて頂いたりもしました。

二つ目は、一枚の用紙に会員名を全部載せることの難しさです。文字が小さく、判読に苦労されたと思います。予算節減のため、申し訳ありませんでした。

次は発送実務です。会員にお届けする封筒には、投票用紙と投票用の切手付きの封筒を同封しました。封筒の中に、所定のものが入っているかどうか、その厳密さが要求される事から、2人一組で作業と点検を行い、最後は、秤を持ち込んで全部を調べ直すこともしました。

まちがって投票用紙が二枚入っているなどしたら大変です。2人一組で確認しながら用紙をセットして入れたのですが、秤にかけてみると、やっぱりそうした間違いが見つかりまして、秤の威力にただ感謝あるのみでした。この日は3名の学生にアルバイトをお願いしました。そして投函。

開票実務は(12月17日)武蔵野女子大で、宮坂元裕氏の立会のもとで行われました。

・投票総数153(27.7%) 無効5(7名以

上の記入) 有効148

・得票1位から15位までを選出。得票順に補充理事・監事候補も選出。立会人からの公正な選挙であった旨の結果報告書を受けました。

上記の結果をふまえ、(12月27日)に投票選出理事(15名)の最初の顔合わせと、補充理事・監事選出の協議会を開催。その席で、新役員{理事・監事}が基本的に確定しました。(選管の仕事はここまで)

次は新理事会において、代表理事や新事務局の選出などが行われ、3月27日の総会で全ての新体制の承認を受ける事が出来ました。以上が経過の概要です。

選ばれた方々は、どなたも忙しく、様々な困難な状況をお持ちですが、投票の結果は会員の皆さんの意志を反映したものだけに、それを尊重して頂き、新役員の仕事を受けて頂きました。有難うございました。

最後に、いくつか考えさせられた事を添えて、まとめと致します。

会員名簿には登録されていても、住所変更などで封筒が返送される場合が少なからずあります。(住所変更の場合は事務局か、学会事務センターへご一報を)

投票率がよくありませんでした。なにをどう改善すれば宜しいでしょうか。日常の活動に起因する事なのか、人的交流の機会が少なく、適任者のイメージが持ちにくいいためなのか、いずれにせよ会を盛り上げ、投票行為を活性化する必要を感じますので、今後に向けてお考えなど、ご意見をお寄せください。

今回の選挙実務に必要な経費は、節減を念頭に努力しても161190円を要しました。その殆んどが、切手などの郵送費や印刷費です。一方、委員の方や立会人の交通費や連絡費などは、その都度自己負担でご協力頂きました。そうした献身性に支えられての選管の活動でした。

新体制の発足について

前代表理事 花篤 實

前回の学会通信(40号)で、私は今直面している此の学会の問題と課題を余すことなく申し上げ、会員諸氏の一層の御支援と御協力を願った次第ですが、これらの問題は教育や社会を取り巻く現在の大きな変革の流れに関わるものである事は言う迄もありません。

『新しい酒は新しい革袋で』という古諺を出す迄も無く、こうした課題は新しい人たちの執行体制で乗り切って戴くのが至当と言う思いで、私は予てより次世代にスムーズに受け継がれる様努めてきました。今回の役員選挙に際しても、新理事会召集での補充理事選出だけという従来の慣例を換えて、学会迄の短期間に2回にわたって集合戴き、新しい執行部のあり方(役員、事務局)をまずご討議戴き、十分時間を掛けて、世代交代による新しい体制を作って戴きました。その間の浜本選挙管理委員長はじめ新理事の皆様方の御尽力に厚く感謝申し上げます次第です。

顧みますと20年前、奈良の地で鈴木、大勝両氏の呼び掛けに応じて集まったメンバーの一人として、今回次世代の人たちにバトンを渡す役目を持たた事を率直に慶びたいと思います。新執行部の人たちも、若手研究者として最初から参加されていた人もありました。文字通りこの学会で育ち、大きくなられた事を考えますと、これからは本当に自分達の問題として後進の育成と美術教育学確立の場としての学会の発展を期待して止みません。

我々創設期の世代と違って、今後は人間関係だけで無く個人主義に立った投票や割り当てと言った合理性で運営していかねばならないと思いますが、美術教育を愛し、此の学的研究に情熱をかけた結成の志と人のつながりの想いは是非大切にしたいと願います。

新学会誌編集委員会から

学会誌編集委員長 長田謙一

学会誌編集委員会発足

学会誌論文投稿の「執筆要領」等を定める今期学会誌編集委員会が発足しました。編集委員長は、すでに、理事会・大会の議を経て長田が担当することになっておりましたが、次の7名の理事の方々によって編集委員会を組織することになりましたのでご報告いたします：赤木里香子・上山浩・仲瀬律久・永守基樹・西野範夫・浜本昌宏(敬称略・50音順)・長田謙一(委員長)。

大きな転換期に直面しているといわれる美術教育ですが、斯学の新しい飛躍にむけて本学会誌の果たす役割はますます大きくなっています。学会員の皆様の力のこもったご研究によって、学会誌がさらに充実・発展していくことを願いつつ、委員一同微力を尽くす所存であります。どうぞよろしく願います。

学会誌の一層の充実・経済化・編集事務合理化を意図して、学会誌論文の最終入稿に際して準拠していただく執筆要領の改訂を進めています。その制定に当たって最も中心的なポイントは、学会員の一層旺盛な論文ご投稿を期し、かつ学会誌としての高いクオリティを確保しつつ、発行のための経費と事務量を可能な限り合理的に削減することにあります。編集委員会として、できるだけの努力をしたいと考えておりますが、投稿に当たって、投稿者の皆様に、今まで以上にご協力いただかねばならない面もでてまいります。昨今の学会誌発行財政条件の厳しさをなにとぞご理解いただいて、ご了承頂きますようお願いいたします。

学会誌『美術教育学』第23号(2002年3月刊行予定)論文投稿について

本学会の学会誌掲載論文については、全国大会での口頭発表によるものに限らず、常時、会員からの論文投稿を受け付けています。学会誌掲載論文は、査読委員による査読結果を受けて、編集委員会の議を経た上で、理事会の付託を得て決定されます。

本年度につきましては、査読用原稿締め切りを、本年8月24日(金)必着(ただし特別猶予あり)とさせていただきます。その後二日間で投稿原稿整理の事務を行い、編集委員会・理事会の開催(8月下旬)と査読委員による査読を経、再度の編集委員会開催という運びになる予定です。掲載が決定した後(条件付き掲載を含む)の作業に関しましては、投稿者に改めてご連絡いたしますが、最終的には、現在改訂作業中の執筆要領に従って再度原稿を提出願うこととなります。その最終原稿提出時期は、本年度につきましては10月下旬と予定しています。

さしあたり、8月24日(金)締め切りまでにご送付いただく内容につきまして、下記にご案内させていただきます。なお、ご不明な点がございましたらご遠慮なくお問い合わせ下さい。

送付物

査読用原稿(プリントアウトされたもの4部(複写可)及び図版・図表コピー4部)

文字原稿形式は、学会誌22号等を参考にさせていただき読みやすい形式のものをA4版にてご用意下さい。ただし、投稿時は、英文タイトル・英文要約は4部とも不要(入れてもかまわない)であり、また図版・図表は下記の通りコピー等がかまいません(レイアウトは仮のものとなります)。

図版・図表 投稿時は、コピー等で4部。なお、投稿時にすでに図版・図表を本文にレイアウトしてプリントアウトしたのものも

可。ただし、査読結果後、レイアウト変更が生じることをお含み下さい。

論文査読結果返信用封筒(A4版用[角形2号]、返信用切手270円貼付)返信用宛先(投稿者住所氏名)記入済みのもの)

論文査読用郵送料として、郵便切手1080円(270円×4)分を同封して下さい。

論文受領確認はがき(50円官製はがきに返信用宛先記入済みのもの)

緊急連絡先のメモ(A5版[A4版半切]横位置横書きにして、氏名、電話番号[自宅・職場の別明記]その他にFax番号や携帯番号、E-Mailアドレスなど確実なアクセス方法を明記して下さい。

送付方法等

締切：2001年8月24日(金)必着
(この締め切りは、理事会ならびに編集委員会の日程との関係で設定されたもので、昨年より一週間早まっていますのでご注意下さい。)

特別猶予期間：やむを得ぬ事情で、同日までに完成原稿をお送りいただけない方には、必ず投稿できる旨の申し出と投稿予定論文和文レジュメ(200字程度)を24日までにお送りいただいた場合について、8月31日(金)必着)まで特別猶予期間を設けます。

宛先：〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町1-33
千葉大学教育学部 芸術学研究室 長田謙一 気付
美術科教育学会誌編集委員会

送付方法：郵送に限ります

(手渡し・宅急便等不可)

備考：投稿に際して、別紙「要領」に記した通り、査読後掲載が決定した場合、投稿料を納めていただくことになっています。これらをご用意いただけない場合、掲載可を取り消さざるを得ない場合があります。

照会先

長田謙一 Phone/Fax 043-290-2658

E-Mail: nagata@cue.e.chiba-u.ac.jp および HZC01547@nifty.ne.jp(メ-ルを出されるときは両アドレスに送付して下さい。なお、査読後は内容別に照会先が異なることとなります。後日、執筆要領をご参照下さい)。

第23回美術科教育学会 筑波大会報告

岡崎昭夫・直江俊雄（筑波大学）

第23回美術科教育学会筑波大会は、平成13年3月26、27の両日、筑波大学にて無事開催することができました。当日ご参加の皆様、会員の皆様、その他ご協力いただきました全ての方々に、厚く御礼申し上げます。

本大会は、ホームページに掲載させていただきました仲瀬律久元筑波大学教授のメッセージにもありましたように、日程の短縮、研究発表の重視、そしてインターネットによる発表受け付けの試み等によって、今後、スタッフ不足など同様な課題を抱える他の大会会場等におきましても、継続的に開催可能なモデルを提示したいと取り組んで参りました。

研究発表や特別行事等は、例年規模に準備が整いましたが、事前参加申込数が伸びず（これも例年のことのようなので、開催スタッフの心労を減らすためにも、何らかの改善策が望まれます）、当日朝の小雨の中、暗澹たる思いで開会準備に走り回っておりましたところ、午後には雨も上がり、光が差すと共に、予想を超える多くの参加者の方々が続々と「当日申し込み」で受付に集まってこられ、スタッフ一同、安堵の笑みを交わしながら、対応に追われたのでした。

初日の活発な研究発表の最後は、特別行事としてのバウハウス再現授業でした。スピリチュアルなセレモニーのように幕を開け、



開会式より（花篤代表理事）

無言のまま幕を閉じたい、という演出者の意図により、階段教室に詰めかけた多数の参加者とともにアザミを描き、見守る熱気の中で演劇的に進められました。その後の懇親会にも事前申し込みをはるかに超える「当日参加者」で、会場があふれんばかりでした。

二日目は、新しい試みである長時間の研究発表、研究発表枠における研究部会の開



バウハウス再現授業より（岡本氏演じるイッテンとアザミの花）



講演「総合造形教育」(三田村氏)

催が意欲的に行われ、三田村氏による「総合造形教育」に関する特別講演、最後の岡崎章氏による鑑賞ロボットの開発を通じた感性評価の研究プロジェクトについての特別講演まで、多数の参加者による熱心な聴講と質疑がありました。最終的には、スタッフを含めて約250名の参加を見ることがで



閉会式より(柴田新代表理事)

きました。

本大会での試みを今後の大会が引き継がれるものもあるでしょうし、その大会の方針によって、また独自に切り開かれるものもあるでしょう。実務的な観点からは、

(1) 多くの方が参加しやすい日時の設定 (2) 事前参加申し込みの推進 (3) 研究部会の時間の位置付け、などが今後の課題となりうると思います。また、新しい研究成果を発信、共有し、研究者を育てる場として、大会が学会内外にとって、より魅力ある場所であるように、力を合わせていきたいものです。次の鳴門大会での、さらなる飛躍と成功を、心より念願し、またご支援して参りたいと思います。以上大会の御礼と報告でした。



インターネットを介して鑑賞ロボットの实演をする(岡崎氏)

2001年度春季学会役員会及び第23回学会総会について

事務局 長谷川 哲哉

恒例の春季役員会(旧)が去る3月26日に、新役員会が27日に筑波大学大会会場内にて開催されましたので、議題等について簡単な報告を致します。

旧役員会議事録

1. 新入会員申込み者の承認、全員承認。
2. 2000年度会計決算案、原案承認。
3. 2001年度会計予算案、原案承認。
4. 次回リサーチ・フォーラム(8月)の計画について、岩崎理事より説明され、原案承認。
5. 次期役員選挙の経過と結果について浜本委員長より説明、続いて花篤代表理事より新執行部体制について説明され、承認。
6. 事務局の引き継ぎ計画(8月末完了)について長谷川・旧事務局代表が説明し、承認。
7. 次回大会開催大学について花篤代表理事より、鳴門教育大が引き受け大塚美術館を会場とする、との紹介があり、承認。

報告事項(主な題目)

1. 会計の健全化に関し。
2. 会費未納者の取り扱いに関し。
3. 学会誌22号の発行に関し。
4. 学術振興会助成金の申請に関し。

新役員会議事録

花篤代表理事を議長にして進められました。

1. 事務局体制について柴田新代表理事より、事務局の規模を縮小すること(助手1名、院生2名)事務局を東京学芸大学におくこと、理事の役割分担の強化するこ

と、細部については、今後の課題である、等の意向が表明され承認されました。

2. 副代表理事の選出を行ない以下の結果となりました。宮坂氏が東地域・総務担当の副代表理事に、藤江氏を西地域・研究担当の副代表理事に選出されました。
3. 学会誌編集委員長の選出を行ない、長田氏が選ばれました。同時に、編集員会は委員長が組織することに決定しました。
4. その他：アートセラピー研究部会が新たに、承認されました。

第23回学会総会について

毎年恒例の美術科教育学会総会が27日に筑波大学大会会場内にて開催されましたので、議題等について簡単な報告を致します。

日時：3月27日16時00分～17時00分

- ・花篤代表理事の開会挨拶
- ・成立条件確認(議長：長谷川旧事務局代表)

議 題

1. 2000年度会計決算案の説明(岩崎理事)が資料に基づいてあり、続いて監査報告(福本監事)がなされ、原案が賛成多数で承認されました。(14頁参照)
2. 2001年度会計予算案の説明(岩崎理事)が資料に基づいてあり、原案が賛成多数で承認されました。(14頁参照)
3. 次回リサーチ・フォーラムの開催計画(テーマ：総合学習と美術教育)について岩崎理事より説明があり、賛成多数で承認されました。(9,10頁参照)
4. 今期役員選挙の経過と結果について浜本選挙管理委員長より説明があり、続いて花篤旧代表理事より新役員体制の紹介(新代表理事と新副代表理事)がなされました。賛成多数で承認されました。
5. 次回大会開催大学について花篤代表理事より、鳴門教育大が引き受け大塚美術館を会場とする、との紹介があり承認されました。続いて鳴門教育大学の橋本理事と山木氏とが開催計画の概要を披露しました。

報告事項(主な題目)

1. 学術会議参加活動について 教科教育学研連の説明(長谷川)・芸術学研連の説明(長田) 2. 学会誌22号の発行、23号編集日程についての説明(柴田) 3. 学術振興会助成金の申請についての説明(上山) 4. 情報学研究所関係の説明(上山) 5. 学会通信関係の説明(宇田) 6. その他.

リサーチ・フォーラム 2001 (第3回美術科教育学会課題研究会、研究課題「総合学習と美術教育」)について

コーディネータ

福本謹一(兵庫教育大学)

岩崎由紀夫(大阪教育大学)

新入会員の紹介

事務局 永守基樹(和歌山大学)

3月27日の筑波大学における役員会と、5月下旬に行われた持ち回り総務会によって、以下の方々が新入会員として承認されましたので、ご紹介します。

木下悌二(長崎県立希望ヶ丘養護学校教諭)

長瀬達也(秋田大学講師)

金沢 韻(熊本市美術館設立準備室)

宮之原ノリ子(InSEA)

中西幸子(愛知教育大学大学院)

イ・チウン(愛知教育大学大学院)

神谷宣欽(愛知教育大学大学院)

深山路子(愛知教育大学大学院)

三宅佳子(愛知教育大学大学院)

岡野素子(筑波大学大学院)

《テーマ設定の趣旨》

今回のリサーチ・フォーラムでは、一昨年の美術教育におけるディシプリン(規範性)の問題及び昨年の美術批評と鑑賞教育の状況における諸課題を検討したことを引き継ぐ形でより危急の課題として「総合的な学習と美術教育のかかわり」を設定することになった。

美術教科に対する配当時間数削減という状況において教科と総合的な学習の時間の関わりを論議することは、各方面で行われている。芸術教科の統合や教科廃止といったことが、まことしやかに語られる状況下で美術教育がどのような関係性を見いだしていけるのか、また、美術教科自体の学習の問い直しをどう図っていくのか、さらに今後の教科の存立についてアクション・プランを策定することは可能なのかといった問題意識に立脚しながら、総合学習の理論的・実践的な検討を行うことが重要であると考えた。

教育における総合的で統合的な動きは、近代のカリキュラム開発の一つの特徴として幾度となく立ち現れてきた。教科の分立化、並列化の中でカリキュラム改造の基本的理念として、教科間の融和、統合を図り、何らかの形で総合的で超教科的な形が常に模索されてきたのである。その理論、実践の様式はさまざまで一律ではない。

歴史的には、ヘルバルドの教科の「相関」概念に基づいた学校教育における統合的ア

アプローチに由来すると考えられるが、教科内における諸教材の統合を意味する場合や、中心的教科や価値領域を軸に他教科を集約しようとするもの、教科を全く設定せずに、特定の価値や理念、思考様式のもとに教育内容をすべて統合しようとするもの、生徒の生活経験上の個人的・社会的問題を中心にして教育課程を編成するものなど多様であった。我が国でも、総合学習の先導的な試みが展開されてきたが、その意味合いはそれぞれに異なっている。

こうした動向の中で、美術教育からのアプローチはいかなるものであったのか。米国の美術教育においては、60年代からそれぞれディシプリンをまたぐインターディシプリナリーな取り組みが多様な形で展開したが、いつしかディシプリンに依拠するDBAEが脚光を浴びることになった。その学際的な取り組みは芸術内総合という形で展開し、必ずしもミドルスクールなどの総合的なプロジェクトアプローチには貢献しなかったようである。

こうした諸外国の動向も見据えながら、総合的な学習の展開が到来するなかで、どれほど図画工作や美術科の自己像を明確にできるかどうか、また再構築主義や構成主義のもたらした自己・他者、個人・社会、教科・教科などの関係性が追究される状況において、総合と美術教科との連携はどういった形で可能なのか。

こうした課題意識をふまえると、今回のリサーチ・フォーラムの第一義的な目的は、近代的教育課程論の基本的問題である総合もしくは統合の持つ意味を再確認しながら、総合学習の歴史的変遷を振り返るとともに、諸外国の総合学習を含む総合的な学習の時間の定立に至る諸背景を検討すること、さらにその美術教科の学習の意義を総合学習の実践とのかかわりにおいて検討することになる。これらの点に関して、今回は以下のような3件の研究発表を計画した。

まず、総合学習の歴史的展開を含め教育学

的考察について福島大学の三浦浩喜氏が発表を行う。次に諸外国、主に米国の美術教育における学際的な取り組みと可能性について福本謹一が発表を行う。また、総合学習をめぐる状況と展開について実践者としての立場から小学校から辻政博氏、中学校の松原雅俊氏、岩崎由紀夫が総合学習と図画工作科・美術科の関わりについての具体的な取り組みと今後の展望について提案を行う予定である。

テーマ 総合学習と美術教育

日時 平成13年8月28日(火) 午前10時
～午後4時

10時～14時 / 発表・質疑応答

14時～16時 / 全体討議他

場所 ぺんてる本社ビル 14階会議室
東京都中央区日本橋小網町7-2

(地下鉄東西線又は日比谷線茅場町駅

下車 新大橋通を北に徒歩約5分)

入場無料(非学会員の方も参加可能)

コーディネーター 福本謹一、岩崎由紀夫
司会者 宇田秀士(奈良教育大学)

発表者

- 1「総合学習と美術教育 - 教育学的観点から」三浦 浩喜(福島大学)
- 2「総合学習の比較教育学的検討」福本 謹一(兵庫教育大学)
- 3「総合学習をめぐる状況と展開」

・岩崎由紀夫(大阪教育大学)

・辻 政博(板橋区立上板橋第二小)

・松原 雅俊(横浜市立上郷中)

最終総括 宮坂元裕(横浜国立大学)

問い合わせ先

兵庫教育大学 福本謹一

TEL: 0795-44-2255

E-Mail: fukumo@art.hyogo-u.ac.jp

大阪教育大学 岩崎由紀夫

TEL: 06-6775-6616

FAX: 06-6775-6633

E-Mail:

yiwasaki@cc.osaka-kyoiku.ac.jp

学会の危機意識

那賀貞彦（大阪教育大学）

先日の学会のあとでの懇談会で、懇談会にふさわしくない発言をしたのはほかでもない、“学会の未来のために”を考えていたからである。研究発表だけをともかくこなして、なんの問題意識もないまま（危機意識とはいわないが）、和気あいあいと懇談につどうという学会に腹がたったのである。

直接的には、イッテンの「パウハウスの模擬授業」の学会イベントが、その表現主義的な部分だけが紹介されて、すこしも学会的な“検証”がなされず、討論などのフォローがなかったことへのいらだちだったのであるが、そこにも、危機意識はもちろん、なんの問題意識もみられなかったのである。

かつての学会は、たとえば、「教科」としての存続の危機意識などから一定の緊張感がうまれたけれども、学会の成熟のなかで、学会の知的レベルそのものがはらむ問題意識があって当然である。「美術教育学」という、まさに学としての成立の問題意識であったり、その学的レベルの要求からの固有の問題意識であったり、また、時代の要求する“現代的”な問題意識であってもよい。

切実な問題性を感じるものにとってはやはり危機意識として意識される問題意識があって、はじめて緊張感はうまれるものであって、われわれの学会が必要とするのもまさにそれである。

その意味では、99年度の学会のRF（リサーチ・フォーラム）の設置と、その第一回の課題設定は、学会としてのそれなりの問題意識をみせたものといえる。なにより「美術教育におけるディスプリン（規範性）」を課題として掲げ得たのは、学会の知的レベルの成熟

を示すものとして意味があったと考えられる。

ほんらい、なんらかのディスプリンに依拠して展開されているはずのものを、あらためて学的検証を加えるということであって、そこには学会としての問題意識が（ほかならぬ、学的な危機意識といってもよい）充分にみられたのである。学会としての緊張感もうまれたといつてよい。

その第二回としての「美術教育における批評性」も、美術教育のディスプリンとして、知的な「美術史学」の領域とともに、専門的な「美術批評」の領域を問題にしようということで99年度の連続性において設定されていたとは思いますが、しかし、美術教育における「批評性」の問題は別の次元の問題をはらむのであって、必ずしもディスプリン論の具体化の枠におさまるものではない。

アイズナーのいう批評性のアスペクトというのは、専門領域としてのディスプリンなどではなくて、子ども自身の表現における創作意識と、知的な、つまり学的な（＝美術史的な）認識のアスペクトに対して設定されているのである。つまり、専門的な美術評論家などにおける批評性ではなく、なにより子ども自身のもつ批評性こそが問題なのである。

そのような問題意識のないままのRFの展開と、その後の学会の推移が、現在の緊張感の希薄な状況をうんだと思われてならない。

子ども自身のもつ批評性を考えるというのはたいへんな問題意識というべきであって、教師の側の教育のプロジェクトを破壊するような問題をはらみ、あるいは、社会的に容認された美意識の破壊を帰結するかもしれないのであって、本気で考えるべきことであるのはいうまでもない。

しかし、「ディスプリン論」の次に「批評論」を考えるとといったとりとめのない問題設定としてあるかぎり、危機意識にまで高まる真の問題意識を形成することはないのではあるまいか。

これが、“学会の未来のために”いっておくべきことである。

互いにひらく 小学校現場からの発言

郡司明子（お茶の水女子大学附属
小、前・群馬県甘楽町立小幡小）

美術科教育学会を「知の集まる場」と捉えて久しい。幼・小・中・高の教員、大学院生から大学教官まで皆、美術教育における課題意識を持ち、それに対する考えを交流し合える場としての学会。学生として参加させていただいた期間、自身の研究に対する多大な刺激と、学びの契機になる情報を手にすることが出来たことは大きな喜びだった。

さて、小学校現場に身を置いて3年目、この間に私のなかで大きな存在であった“学会”がぐいぐいとノミで削られるごとく姿を小さくしていったのはなぜだろう。私の研究意識を支える力量の限界といえはそれまでだが、小学校現場の日常にも耳を傾けていただきたい。

私の与えられた職場は小さな城下町にある中規模校の小学校だった。図工専科とはいかず、クラス担任として全教科の授業をほぼ受け持った。低学年にでもなれば、子どもが学校にいる間はつきっきりで自分はトイレに行く間もないほどである。授業の準備はもちろん、事務仕事やその他の仕事も後を絶たない。集金及びお金の管理。畑仕事は、さくきりからマルチをかけるに至るまで、肥料を混ぜる配分にも通じる必要がある。何でも屋の小学校教師。毎日の子どもの表情に気を配り、生徒指導に心を痛めては学級経営に頭を悩ませる。子どものノートに目を通しては、学力低下を気に病み、一方で総合的な学習の時間の扱いに戸惑う日々。これが小学校教師駆け出しの私の姿であった。おそらく経験を積まれた先生方は、さらに学校全体の運営に

携わり大小の問題を抱えつつ、食いしばっておられるのであろう。

そんなドタバタした小学校現場にとっぴりつかり、仕事を終えて家路に着くと、美術科教育学会通信が届いている。封を開け「ああ、私は美術教育畑の人間だったのだわ。」と久しぶりに自分の立場を確認する。ところが、学生の私を引きつけてやまなかった学会の動向、あらゆる先生方の文章が、遠い異国の出来事のように思えた時期があった。なぜなら、それらの話題と目の前にいる子どもたちとの直接的な結びつきを見出すことができなかったからだ。私自身が現場で課題に思うこと、例えば図工の授業が子どもにとって楽しく充実した学びになるにはどのような教材でどのように授業をつくっていくのか、あるいは、なかなか活動に入れない発想の乏しい子への支援をどうすればよいか、などという事柄の次元とは異なったところに“学会”が存在しているように思えた。

たしかに“学会”は、広く教科教育としての美術教育の活性化を促進するために成立しているものであり、小学校の一教師の要求に応える機関でないことは承知している。しかし、その美術教育は誰のためにあるのか、といえば紛れもなく学ぶ者すなわち小学校でいえば子どものためである。したがって美術科教育学会のあらゆる取り組みが、いずれは子どもたちに還元されるものであればありがたい。現場の教師は雑務に追われながらも、教材研究を満足にしたい、授業をよくしたい、授業を振り返り仲間と語り合いたいと願っている。そんな思いを受け止めてもらえる場が美術科教育学会であればとても心強い。授業に関連し現場の教師の知的な関心や学びたい意欲を耕せるような企画、さらには「知の集まる場」の情報を引き寄せ、自らつながってゆけるようなシステムの工夫を期待したい。

これらの期待に応えつつあるのが、美術科教育学会の研究部会の一つである「美術教育の課題と授業研究部会」の活動であろう。現場の声を聞き取り、授業実践を会報にて提供

するなど、学会の役割を大きくひらくことになった。それに対して現場側も積極的に授業の実践報告を行い課題を声に出して、閉じた状態からひらいてゆく努力が必要になる。互いにひらき合い情報を共有し学び合うなかで、美術教師としての力量を向上させ、子どもたちに上質の授業を保障してゆきたいと願う。(写真：前任校での実践「顔で遊ぼう」[小学校1年]より)



研究部会だより

アートセラピー研究部会 会員募集

日野陽子(香川大学)

創造力や表現力が、人が生きるための力の源となり、また、生きていく過程で治癒や成長の足がかりとなり得る、その可能性は、長い美術教育の歴史の根底に流れ続け、支えとなってきました。そして、この力は現代、学校教育の場のみならず、治療・医療施設や作業所、生涯教育センター等さまざまな場で生かされ、より豊かな在り方を模索されています。

しかし、これまでのところ我が国でアートセラピーは、心理学や精神医学の領域における研究・実践が先行している状況にあります。指導者と子どもたち(表現者)の両者が共に芸術的な体験を重ねることが土台にある美術教育の、質実を踏まえた多様な研究が定着しつつある本学会において、芸術の治癒的な力に注目し、どのように生かしていくかを探求することは、大きな意義のあることと考えられます。こうした視点・立場に関心をお持ちの方は、当研究会にご参加くださいますようお願い申し上げます。

代表 花篤 實(大阪芸術大学)
事務局 阿部寿文(大阪女子短期大学)
出版編集 日野陽子(香川大学)
入会連絡先
〒582-8558 藤井寺市春日丘3-8-1
大阪女子短期大学児童教育科 阿部寿文
TEL: 0729-55-07336
E-Mail dpamk208@kawachi.zaq.ne.jp

《美術科教育学会2000年度会計決算報告》

収入の部		単位：円	支出の部		単位：円
項目	収入額		項目	支出額	
年会費	4,502,500		大会補助金	200,000	
・正会員 (4,136,000)			学会誌22号印刷代	2,220,000	
2000年度分 8,000×432+2,000			学会誌21号郵送費(学会センタ-より発送)	107,615	
1999年度分 6,000×62			学会誌22号編集費	122,803	
1998年度分 6,000×51			学会通信編集作成費	34,251	
・賛助会員 (100,000)			学会通信郵送料	271,290	
2000年度分 20,000×4			(内、学会センタ-より、262,490円)		
1999年度分 20,000×1			通信・郵送料	30,535	
・外国会員 (68,300)			会議費	9,542	
・その他 (198,200)			旅費(理事会・総務会)	102,000	
学会誌22号掲載料	452,000		事務補助費	52,500	
<1件28,000円+超過頁1頁分			事務費(消耗品)	100	
5,000円>			部会補助費	125,000	
学会誌売上金 <2,500円×3冊>	7,500		学術協力財団賛助会費	50,000	
「20年史」売上金 <1,000円×1冊>	1,000		学会会議登録料	10,000	
その他	850		リサ-チ-フォ-ラム関連	1,890	
前年度繰越金	26,735		役員選挙関連	161,190	
合計	4,990,585		学会センタ-2000年度会員業務費	749,264	
			学会センタ-上記以外の引落金	247,512	
			予備費	18,130	
			小計	4,513,622	
			次年度繰越金	476,963	
			合計	4,990,585	

2001年3月31日

学会本部事務局会計担当

岩崎由紀夫

《美術科教育学会2001年度会計予算案》

収入の部		単位：円	支出の部		単位：円
項目	収入額		項目	支出額	
前年度繰越金	476,963		大会補助金	200,000	
年会費	3,576,000		学会誌23号印刷代	2,300,000	
<正会員 8,000円×430名			学会誌22号郵送費(学会センタ-より発送)	120,000	
賛助会員 20,000円×4社			学会誌23号編集費	200,000	
海外会員 8,000円×7名>			学会通信編集作成費	50,000	
学会誌22号掲載料	305,000		学会通信郵送料(学会センタ-より発送)	270,000	
学会誌23号掲載料	800,000		通信・郵送料	30,000	
<1件28,000円+超過頁1頁分			会議費	10,000	
5,000円>			旅費(理事会・総務会)	120,000	
学会誌売上金 <2,500円×10冊>	25,000		事務補助費	60,000	
概要集売上金 <700円×5冊>	3,500		事務費(消耗品)	10,000	
合計	5,186,463		部会補助費	130,000	
			学術協力財団賛助会費	50,000	
			学会会議登録料	10,000	
			学会センタ-2001年度会員業務費	750,000	
			学会センタ-上記以外の引落金	160,000	
			予備費	30,000	
			小計	4,500,000	
			次年度繰越金	686,463	
			合計	5,186,463	

2001年3月31日

学会本部事務局会計担当

岩崎由紀夫

研究ノート/実践報告

実践報告:「大学院生の文章表現とその指導」

高橋敏之（岡山大学）

ある博士課程の院生が書いた次の文章を読んでみましょう。この文章を教材にして、文章表現に関する見解を述べてみます。「ところで、特に70年代以降の写真映像を用いる作家達には、メディアに対する自己言及的なアプローチという動向の中で、写真というメディアの性質である指標記号としての特殊性（不透明さ）に着目し、それを露呈させるような作品を試みたり、さらには広告等の類型化された写真を逆用して、広告を切り取ることで改めて意味を宙吊りにする作品を制作している。」

第1に、主語―述語の関係が不整合であることに気づきます。「作家達には」を生かすのであれば、文末は必然的に「～するなどの特徴がある」や「～者もいる」などになります。述語の「制作している」を生かすのであれば、主語は「作家達は」になります。このように主述の関係への配慮は、文章表現の基本です。

第2に、「試みたり」とするのであれば、どこかにそのあとに「～たり」になる並列関係の語句が来るはずですが、この文章が手ごわいのは、「宙吊りにしたりする」と修正しても問題が解決されないことです。なぜかと言うと、「作品を試みたり」になっているからです。ここで並列関係を崩さないようにすると文末の方を修正せざるを得なくなり、文末は「作品を制作したりする」になります。それでも、まだおかしいのです。それは、他動詞下一段活用「させる」を使った「露呈させるような」に対応させて、「宙吊りにさせるよ

うな」にしなくてはならないからです。

第3に、1文が166字というのは、うんざりする長さです。ワープロソフトの中には文書全体の1文の平均文字数を瞬時に計算してくれる機能があります。これを使えば自分の文章が長いか短いかが分かります。平均が40字くらいになるのがいいと思います。以上のような合わせ技によって、この文章は非常に読みにくいものになっています。文章が流れず、いちいち引っかかります。応急処置を無理矢理すれば、「…作家達には、…露呈させるような作品を試みたり、…意味を宙吊りにさせるような作品を制作したりするなどの特徴がある(者もいる)。」という程度には直ります。それでも、まだ気分が晴れません。

それは第4に、文法上の不自然さを取り去っても、文章の意味内容が分からないからです。「指標記号」とは何なんだ? 「特殊性」がどうして「不透明」なんだ? 「広告を切り取」ったら、どうして意味が「宙吊りに」なるんだ? などの疑問が解決されないからです。文章の中身と文法は、別物であることがよく分かります。

第5は、「ところで」という接続詞です。私は、自分の論文では絶対に使いません。なぜなら「ところで」は、話題をかえるときに用いる接続詞だからです。それを使用することは、論理を構築して進めてきた議論の腰を折ることになります。話題を転換させる必要はないのです。結論が出るまで、徹頭徹尾その主題から離れないのが論文ではないでしょうか。同様の理由から、私は「さて」も論文では使いません。「ところで」や「さて」は、「それはそうとして。ときに」という意味ですから、別のことを述べようとするときに使う言葉です。したがって、一般的には手紙文や日常会話ではよく使われますが、私はそういう場合でもほとんど使いません。

文章表現の要点をまとめてみましょう。主述の関係の不整合、並列関係の崩れ、文章の長さ、文章の意味内容、接続詞と文末表現、に気をつけるということです。



書評 & 文献紹介

丸山圭三郎『言葉とは何か』 (改訂新版), 夏目書房, 2001

西村俊夫 (上越教育大学)

F.ソシュール(1857~1913)は現代言語学と記号学の父であり、したがって20世紀の人文・社会科学、心理学、芸術学等の発展の礎となった人物であることは良く知られている。またソシュールが一般言語学に関する本を書かず、彼の言語学、記号学の理論を伝える重要な文献『一般言語学講義』が、ソシュールの講義を受けた受講者のノートをもとに編纂されたものであることも周知のとおりである。ただし、この『一般言語学講義』の編者であるセシュとバイイは直接にはソシュールの講義を聞いておらず、したがってこの書の内容が必ずしもソシュールの考えを正確に伝えたものではないことも周知のことである。この書が出てからおおよそ30年後にソシュールの遺稿や新たな講義録が発見され、それによってソシュール研究が進展した。とは言え、『一般言語学講義』がロラン・バルト、ジャック・ラカンら20世紀後半の「現代思想」を牽引する思想家たちの「バイブル」となったことは良く知られている。

丸山圭三郎(1933~1993)はソシュール研究の第一人者である。私たちがソシュールの言語学・記号学について「勉強」しようする場合、もちろん『一般言語学講義』は欠かせない文献だが、上記のような理由によりこの文献だけでは不十分である。今日、ソシュールについて学ぼうとする時、丸山の著書は欠かせないものとなっている。丸山は生涯「ソシュール研究者」ではあったが、中盤から後半にかけてはソシュールの思想を基盤としながらも、それを超えた独自の言語論・

文化論を展開した。

本書は、『フランス語とフランス人氣質』という1982年に出された本の中から、「言語と文化」「言葉とは何か」という言語学・記号学の入門部分を抜き出し、中尾浩氏が60ページに及ぶ解説・人物紹介・術語解説を加えて1994年に出されたものである。2001年4月に、新たに中尾氏の「改訂新版へのあとがき」が9ページ加えられた改訂新版が出された。丸山自身が『生命と過剰』(1987)のあとがきの中で、自身の代表作3冊の一つで「言葉は思想である」ことを明らかにしたものと語る『ソシュールの思想』(1981)の丸山自身による解説の書ともいべきものである。ちなみに代表作と語る他の2冊は、『文化のフェティシズム』(1984)と『生命と過剰』である。

本書の第一章「言葉と文化」の冒頭で丸山は、私たちが言葉に対して持っている常識「言葉とは物や概念の呼び名である」は間違いであると指摘する。丸山は本書の中で、言葉が、あらかじめ区切られた独立の存在である物や概念の名前ではないということを繰り返し述べている。そして「私たちの生活している世界は、言葉を知る以前からきちんと区分され、分類化されているのでは」なく、「単語のもつ音の価値も、意味の価値も、その言語の体系のなかでだけで決定される」のだと語る。

第二章「言葉と何か」では、ランガージュとラング、ラングとパロール、シニフィアンとシニフィエ、連辞関係と連合(連想)関係、恣意性、デノテーションとコノテーションなどソシュール言語学の基本概念全般に渡って簡単に分かり易く(したがって、不十分な面があることは否めないが)説明されている。例えば、体系について「ソシュールの言った言語の体系は、全体があってはじめて個が存在するものであり、そこでは独立した個々の要素があってはじめて全体を作るのではなく、全体との関連と他の要素との相互作用のなかで、はじめて個の意味が生ずるような体

系なのです」と説明している。

そもそもなぜ「言語」、「ソシユール」、「丸山圭三郎」なのか。

丸山はソシユールの言葉をもとにまず「人間のもつ普遍的な言語能力・抽象化能力・カテゴリー化能力およびその諸活動をランガージュと呼び」、この「ランガージュの所有は、その間接性、代替性、象徴性、抽象性によって人間の一切の文化的営為を可能せしめた」（『ソシユールの思想』1981）と述べている。また、『文化のフェティシズム』（1984）の中で「見分け構造」という本能の図式に加えて、「言分け構造」というもう一つのゲシュタルトを過剰物としてしまった時から人間になったのではないか、とした上で、なぜ過剰なのかの理由について次のように述べている。

「まず第一にそれが身の延長だからである。私たちは言語・所作・音楽・絵画・彫刻といったシンボル活動によって「過去」と「未来」、
「背後のあそこ」と「前方のあそこ」を差異化・差分化する、つまり「今、ここ」という時間・空間を超えた延長を創り出し、「非在の現前」を可能にする。第二には、そもそも生物体としての人間としては存在しなかった「意味=現象」を文字通り身の延長である人工道具によって拡大生産するからこそ、過剰なのである。また丸山は、「読む」という行為と「書く」という行為の関係について「すべての表現作用、すなわち「身振る」「描く」「歌う」「話す」「書く」という行為においては表現と内容というものは分離できない。ということは、あらかじめ存在する既成の内容を何らかの手段で表現するのではないということであり、内容は表現と同時に生れ、存在するということなのだ」（『ソシユールを読む』1983）と述べ、更に、表現とは思考なり情念なりの衣だとかその翻訳であるように考えがちだが、実は思想というものが、その言語表現を見いだす以前に一種のテキストとして存在しているのではないと述べている。

本書『言葉とは何か』の「改訂版へのあとがき」の中で中尾浩氏は、ソシユールは今日でも現代言語学の父として言語学史上、最も重要な人物の一人ではあるが、「ソシユールの学説が今でも言語研究の最先端か」といって、いささか疑問が生じる」と述べている。確かにコンピュータによる自動翻訳システムの開発やインターネットのホームページを自動要約するシステムの開発など、時代の要請に即した研究が必要とされているのだろう。しかし、ソシユールがそして丸山が取り組んだ「言葉とは何か」、「表現とは何か」そして「人間とは何か」という問題を問い直すこともまた時代の要請であるように思われる。美術の表現行為は言うまでもなく、ランガージュである。重ねて言うと「あらかじめ存在する既成の内容を何らかの手段で表現するのではなく、内容は表現と同時に生れ、存在するということなのだ」とある。

中尾氏は本書の解説「丸山圭三郎・ソシユール・文学」の中で丸山最後の著作『ホモ・モルタリス』の中の小説「赤の“ひとかた”」から次の文章を引用している。

「都会の学校には図画という科目があった。正治はあまり好きにはなれなかった。花とか果物とかの写生に決まっていたので、一向に気がのらなかった。正治が描いてみたい絵は、波のように、火のように、風のように、光のように始終動いているもの、描くことではじめて形が立ち現れるものなのだ。それも、目に映る色や形であるとは限らない。耳に聞こえる色、香りが立ち昇る形が描きたかった。」

「その絵は正治の一番大切なものなのですが、また終わっておりません。いくら描いても描ききれない絵だということでした。出来上がったと思って寝ついた晩など、必ず正治の夢にその絵が生き物のように現れて、まだまだ色や形やにおいや音が欲しいとねだるそうです。だから僕は、翌朝には新しいタッチをくり返し加え続けるのだ、と切れ切れの言葉で正治は語るのでした。」

情報発信コーナー

美術科教育学会公開シンポジウム（および講演会）

以下のような美術科教育学会公開シンポジウム（および講演会）が開催されました。開催時期の関係から、通信では広報できませんでしたが、来年3月の学会開催に向けての意気を感じました。

テーマ 新たな造形世界を拓く「鑑賞」による文化の交流 - アーサー・ダウとジャポニズムの美術教育に学ぶ

日時：平成13年(2001)5月26日(土)

午後2:00～5:00

場所：徳島県立近代美術館

1階イベントホール

内容

* 講演 橋本泰幸氏(鳴門教育大学)
「アーサー・ダウとジャポニズムの美術教育」

* シンポジウム

提案者 宮脇 理氏(元筑波大)
花篤 實氏(大阪芸術大)
小川 勝氏(鳴門教育大)
佐々有生氏(鳴門教育大)

谷口幹也氏(鳴門教育大)
結城孝雄氏(兵教大院博士課程)
山木朝彦氏(鳴門教育大)

このイベントに関する問い合わせ先
〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島748
鳴門教育大学 美術科教育学会大会事務局
谷口幹也氏
TEL・FAX088-687-6494

科学研究費補助金の採択結果(追加修正)

学会通信32,36,39号で科学研究費補助金の採択結果をお知らせしてきましたが、以下の長田謙一氏(千葉大学)代表の3年間の研究を掲載しておりませんでした。ここで、お詫びして、お知らせいたします。

この研究については、既に、多方面で発表がなされているかと思いますが、最終報告書にもご注目ください。

<基盤研究(B)>

長田謙一：<美術>展示空間の成立・変容
美術館・画廊・美術展
平成10～12年度 総額1270万円

なお、平成13年度の科研費内定結果の情報も、収集しておりますが、新規分では、堀典子氏、上山浩氏から連絡をいただいています。その他の内定者からの連絡をお待ちしています。

万緑の中や吾子の歯生え初むる

中村草田男

草木の緑が雨にも映える季節になりました。我が学会にも、新しい風が吹き始めたようです。

学会筑波大会、本当にお疲れさまでした。新しい運営方法や一般の方(会員外)を巻き込むイベントは、今後の大会開催に大きな示唆を与えました。上にふれましたように、鳴門大会の準備も既に始まっています。さて、特集「学会の未来のために3,4」では、学会の草創期からの参加者の一人であ

る那賀氏、大学院生としての学会発表を経て小学校教諭3年目の郡司氏、という立場の違うお二人から意見を頂きました。

前号の(フリースクールでの教師経験をお持ちの)吉田氏を含めた三人の語り口からは、学会や美術教育実践に関わる熱き思いを感じました。熱き思いがあるから、困難と感じられる状況でも突破できるのだと思います。学会に関わる者の一人として、これらの声を活かすような活動をせねば、と肝に銘じています。それでは、また夏のリサーチ・フォーラム2001で。(宇田)

編集後記